藤井匡（美術批評家）

重力のある世界と重力のない世界のあいだで

今回の長谷宗悦の作品はすべて壁面展示されるものだが、これらは私に彫刻における重力の問題を考えさせる。意外かもしれない。通常、彫刻における重力の問題は、壁にかけるレリーフではなく、床に置く丸彫り（round）で示されることが多いからである。それは、彫刻史において中心となる人間の立像が、極端に縦長のかたちを小さな接地面で立てることに由来する。一般論として、彫刻は重力に抗して立つのである。

しかしながら、長谷の彫刻はもともとそうした性格を備えていない。床面に設置される場合でも「立てる」ことは少なく、基本となるのは「並べる」と「重ねる」という行為である。そして、「重ねる」際にもそれほど高く積み上げることはない。彼の彫刻は重力に抗して存在するのではなく、重力に即して存在する。

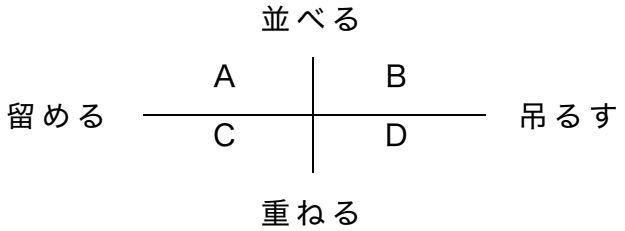
今回の個展の出品作品でも「並べる」と「重ねる」という行為は踏襲されているが、壁面展示になると、そこに「留める」と「吊るす」という行為が加わってくる。そのことによって、重力の問題が前景化するのである。

実際のところ、長谷は重力の問題をさまざまな形式で扱っている。素材はこれまで彼が扱ってきたものと大きくは変わらない。1980 年代から用いられてきた古びた木材、イギリス滞在時から用いられるようになるポリエチレン製のごみ袋、帰国後に使われるようになるパソコンの集積回路や子ども用の玩具などである。これらは鑑賞者に多様な意味を想起させるが、重力という観点からは別のかたちで理解される。立体的か平面的か、つまり、奥行きを備えるか備えないかである。「並べる」「重ねる」「留める」「吊るす」という行為がその差異を大きくするのである。

今回の作品は大きな部屋の 4 点と小さな部屋の 1 点だが、例によって、長

谷の作品にはタイトルがないので、ここでは便宜的にナンバリングする。大きな部屋の時計回りに、(1) 古びた大きな透明シートを壁面に貼り、その上側と向かって左側を中心に古びた木材を取りつけた作品、(2) 子ども用の洋服を密集するように吊り、その上側をアルミ箔で覆った作品、(3) 子ども用の玩具などを透明のシートに入れて、密集するように吊り下げた作品、(4) ポリエチレン製のゴミ袋二種類を切り開いたシートを溶着して、白の上にややずらして黒を重ね、その上側に釘の刺さった細い木材を配置した作品である。小さな部屋には (5) パソコンの集積回路などを中心軸を意識したかたちで並べ、その外側に拡散するように子ども用の玩具などを配置した作品がある。

このように、作品のあり方は多様といえるが、次の表を用いることによって、ある程度整理することができる。今回、新たに登場した「留める」と「吊るす」だが、これは実際の固定方法というよりも、造形的な性格と考えるのが妥当である。薄いシート状の場合、上側のみを固定したとしても壁面に密着するために、「留める」という性格が現れるからである。そのように見た場合、(1) は A、(2) は D、(3)は B、(4)は C に分類することができる。



造形的な性格としては、「留める」ものには床面に置いた作品に似た性格が現れる。床を壁に置き換えた状態、つまり、空間を 90 度回転させた場合とあまり変わらない。したがって、これらの作品と重力との関係はこれまでの作品を踏襲しているところが大きい(とはいえ、それらでも視覚的なバランスが上側に置かれることに注意する必要がある)。他方、「吊るす」ものには床置きの作品と異なった重力との関係が示される。床に置かれた場合、重力のかかる床側以外に引っ張られることはないからである。これらは床置き作品の性格を踏襲するよりも、それと対立する性格を示すことになる。

しかしながら今回の長谷の作品では、さまざまな形式で重力と結びつくことの方が重要だろう。様式的な統一感は意図的に避けられているが、そのことは彫刻と重力の関係を特定のかたちで扱うことができないことを意味しているように思われる。これまでの彫刻家たちは、肯定的にせよ、否定的にせよ、彫刻と重力とは特定の関係を切り結ぶと考えてきた。あるいは、考える以前の自明のこととして扱ってきた。長谷の態度はそうしたものとは別である。そもそも、重力は人間の力の及ぶ領域ではない。今回の作品は、重力に抗するのでも、重力に即するのでもなく、彫刻が重力のなかにあることを示すのである。

その背景には、現在の私たちにとって、重力が確かなものとして感じられなくなってきたことがあるのではないだろうか。たしかに、地球上の重力は昔も今も変わらずに存在する。変わったのは、私たちがそうした現実の世界よりもスマートフォンのなかの世界をリアルだと感じるようになったことである。当然のことながら、それは美術表現にも影響を与える。絵画にせよ、彫刻にせよ、近年、陰影を喪失した無重力的な表現を見ることが多くなった。重要なのは、表現にデジタル・テクノロジーを使用するか否かではない。その影響を受けて、私たちの生活から陰影や重力が失われていったことなのである。そのなかで、長谷は重力とリアルの関係を再検討しようとしているように思われるのである。

小さな部屋にある（5）は、分類的には（A）に属するが、他のものとは異なった性格が見られる。展示の方法として、他の作品が密集する傾向を示すのにたいして、拡散する傾向が見られるからである。それは作品と展示空間を一体として考えるインスタレーション芸術に近いところがあるが、完全にそうだということはない。中心と周縁の関係を明確にもつという、単体としての彫刻の要素も備えるからである。

中心となる部分の素材はコンピューターの集積回路を主とするが、それ以外にも、パソコンの筐体やキーボードも用いられる。それらも含めて、この部分では垂直の中心軸が基調を成している。「吊るす」という方法がとられるわけではないものの、左右対称に近い配置が見る者に重力を印象づけるのであ

る。とはいえ、その垂直性は確固としたものではない。人工性の高い素材であるために個々のパーツは矩形だが、パーツそれぞれの関係ではグリッドが微妙に歪められている。大枠では垂直と水平に基づいているものの、逆に、その垂直と水平が揺らいでいるような感覚を与えるのである。

周縁に近づくにつれて、その配置は次第にバラバラになってゆくが、とくに意識されるのが子ども用玩具である人工樹脂性の魚と長谷自身が描いた魚のイラストである。これらは重力を感じさせにくい水中の印象をつくりだしており、さらに、同じ魚でも立体物の玩具と平面のイラストを併用することが重力の感覚を混乱させる。現実の重力のなかにある玩具とイリュージョンとしての重力を備えるイラストの併用が、重力方向が垂直なのか水平なのかを曖昧にするのである。そして、インスタレーション芸術に近い性格によって、重力方向の曖昧さがこの部屋全体に適用されるような感覚に導かれることになる。

こうした中心から周縁への展開が、かつては疑われることのなかった重力が次第に疑わしいものへと変化してきた時代の流れを暗示するといえば、深読みがすぎるだろうか。